

Thomas Hardy, *The Pursuit of the Well-Beloved* (1892)にみられる

George Meredith 的主題

吉田 朱美

Thomas Hardy の (日本語タイトル)『恋の魂』(1892年に最初に雑誌連載の形で出された際のタイトルは *The Pursuit of the Well-Beloved*, その後大幅に改稿されたのち 1897年に単行本としての出版時には *The Well-Beloved*) は彼の後期小説群の中にあつて異彩を放つ。ほぼ同時期に書かれた *Tess of the D'Urbervilles* や *Jude the Obscure*

はヴィクトリア朝の旧弊な道德規範を糾弾し、教育機会の不平等や男女間での性の二重基準ダブル・スタンダードといった社会問題に意識を向けた社会批判の書としての色彩の強いものであったが、“Romances and Fantasies”というカテゴリーに分類される *The Well-Beloved* は、副題“A Sketch of a Temperament”「ある気質を素描したもの」も示している通り、広く社会に目を向けようというような姿勢は殆どがかわせることなく、審美主義的な芸術家・彫刻家である男性主人公ジョスリン・ピアストン (雑誌版 Jocelyn Pearston・単行本版 Jocelyn Pierston) の内面の精神構造および女性関係にもつばら焦点を当てる。“The Well-Beloved”とよばれる、彼の愛の対象となる女性の理想あるいはアイデアが様々な現実の女性に宿ったように見えるたびに彼が衝動や欲望に駆り立てられ、翻弄されるさまが 40 年間にわたって描かれる。しかもその際、彼の人生を通時的に直線的にたどるのではなく、特定の三つの時点——20 歳時点・40 歳時点・(雑誌版では) 59 歳、あるいは (単行本版では) 60 歳時点——において彼が遭遇する出来事にポイントを絞り、その間の期間は大胆に飛ばす。したがって目次は下記の通りとなる：

The Pursuit of the Well-Beloved (雑誌版)

Part First: A Young Man of Twenty

Part Second: A Young Man of Forty

Part Third: A Young Man of Fifty-Nine

The Well-Beloved (単行本版)

Part First: A Young Man of Twenty

Part Second: A Young Man of Forty

Part Third: A Young Man Turned Sixty

「59 歳の若者」「60 歳になった若者」というのは作者ハーディが、59 歳あるいは 60 歳というのは世間で一般的に考えられている“Young Man”の範疇に収まりづらいことは承知の上で、あえて読者に違和感を抱かせるような意図を含ませてつけたタイトルであったのではないかと考えられる。主人公の Jocelyn は、40 歳になってもその容姿がまったく老化しないばかりか、その内面に至っては 60 歳に至るまでまったく成長も変化も遂げないままなのだ。もし人の本質が精神的な内面にこそあるとするならば、20 歳の頃の Jocelyn が若者であったと同様に、60 歳になってもまた若者として定義されうるということにもなるであろう。

The Pursuit of the Well-Beloved の連載開始より少し前に出版された Oscar Wilde の *The Picture of Dorian Gray* もやはり加齢と老化という問題について意識的人物の外面的容貌と内面や精神性との関係に焦点を当てた作品であったから、*The Pursuit of the Well-Beloved* 執筆に際して Hardy がそこから影響を受けていた可能性は高い。また、さまざまな実在の肉体にやどる理想の愛の幻影を追求する、というイメージが表されているロマン派詩人 Percy Bysshe Shelley の詩“Epipsychidion”にも大きな影響を受けているはずであることはすでに指摘されている (Ingham, “Notes” 339)。本発表ではそれらを踏まえうえて、あまりこのハーディ作品との関連がこれまで指摘されてきていないようである先輩作家 George Meredith との間にみられる興味深いインターテクスチュアリティに着目してみることにした。Hardy が自作の小説を最初に出版社に持ち込んだ際、査読にあたって掲載不可としながらその後作家として身を立てていくための戦略上のアドバイスを彼に与えたのが Meredith であったが、Hardy が作家になってからも彼らの親交は続き、Meredith のいかにも文人らしい風采に影響を受けた Hardy はそのまねをして 1869 年ごろ、立派な髭をたくわえるようになったという (Tomalin 92)。この二人の作家間の影響関係は従来考えられてきた以上に深く濃いものであったりはしないだろうか。

Meredith の小説 *One of Our Conquerors* (1891) における、「わがものとなった思考(an idea)を私たちは追い払うことはできず、それを追求(pursuit)するよう誓わされている」(8)「この思考(this idea)は非常に女性的で、来たい時には向こうからやってくるが求められると逃げてしまう」(9)といった記述には、Hardy が“the Well-Beloved”について説明するのに用いていた語彙との共通性がみられる。また、自分の芸術家としての優越的地

位が若い女性にとって十分な魅力となるはずであろうとの楽観的な思い込みは、Meredith の代表作 *The Egoist* (1879)の主人公 Sir Willoughby Patterne をも彷彿とさせる。三人の異性との恋愛関係 (Pearston はその他に Marcia という別の女性とは結婚にまで至っているが) という、*The Pursuit of the Well-Beloved/ The Well-Beloved* においてはおとぎ話的にも見える枠組みは、*The Egoist* においてもまた共通して見られるものである。

Meredith の“The Gentleman of Fifty and the Damsel of Nineteen”という未完の小品と、*The Pursuit of the Well-Beloved/ The Well-Beloved* との間にみられる、タイトルや主題の奇妙な類似は目を引くものである。*The Pursuit of the Well-Beloved* および *The Well-Beloved* においては物語の後の方になるほど、恋愛対象となる女性と男性主人公との間の年齢差、そして、身体が年齢を重ねたとしても必ずしも精神がそれに伴った変化を遂げるわけではない、というところから生じるギャップに焦点が当てられていく。「彼の体は自然に時の流れに乗っていくのに心は老けないというこの呪い、これはいつまで続くのだろうか。おそらく死ぬまで。」(*The Pursuit of the Well-Beloved*, 106)しかし、人間はそもそも年齢と比例して心も年取っていかなくてはならないものなのだろうか。先輩作家 Meredith はこのような問いにどのように向き合ったのか。Meredith の小品においても、自らの老いを認めながら加齢に抗う 50 がらみの紳士と 19 歳の令嬢とがお互いを恋愛対象として意識し始め認めあっていくという、年齢差恋愛のテーマが扱われる。男性主人公であるポリングレイ氏 (Mr. Pollingray) が、Hardy 小説の主人公 Jocelyn とよく似た状況にあって悩んでいる。50 代と言ったら重みをもって受け取られるはずの年齢なのにどこか未発達な部分のある自分。甥 Charles の婚約者ということになっている 19 歳の Alice に惹かれていく自分の内面は年齢にふさわしくないものなのではないか、それが周囲の女性たちに気取られたりはしないか。

Meredith の小品は生前に公刊されることがなかったとはいえ、このような際立った類似がみられるということは、両作家の間に何らかの形で基となるようなアイデアの交換があったということを示唆するものかもしれない。タイトルに入っている「19 歳の令嬢」である Alice の側も、「Mr. Pollingray の外見からはまさかそのような年齢だとは誰も思いもしない」と保証し、自分と同年代の婚約者である Charles にはない教養と深みのある年齢ゆえの魅力 Mr. Pollingray に見出しつつも、氏が「若く見られようとする」気持ちを非常に強く持っていることも見抜いている。事実、作品の冒頭部分、Alice の父親である牧師が「彼は 50 歳だよ」と自分の年齢を無神経に叫んだことにより、50 歳という年齢が男女の隔てもなくすかのような扱いを受けたことを Mr. Pollingray は深く恨むのだ。自身より 40 歳年下の Avice 3 世の愛を勝ち得るため、若さを取り戻せるなら自らの魂をも売りたいと切に願う Jocelyn (*The Pursuit of the Well-Beloved* 124)との類似は注目に値するといえる。

Hardy の男性主人公のファーストネームが雑誌連載版・単行本版のどちらにおいても Jocelyn となっており、Meredith の自伝的小説 *Evan Harrington* (1860)のヒロイン Rose Jocelyn の苗字と一致しているのも興味深く思われる。Rose Jocelyn のモデルとなったのは Meredith が思いを寄せつつも、画家と駆け落ちしていつってしまった妻が生きている以上求婚することができなかった実在の若い女性 Janet Duff Gordon であったことが知られている。この、別居して会うこともないが生きているかもしれない妻とつながれているという境遇は、*The Pursuit of the Well-Beloved* において Jocelyn が第 2 部以降、置かれているのと同様の状況でもある。Hardy 作品における Shakespeare や Nathaniel Hawthorne へのアリュージョンについては先行研究が存在するが、Hardy は同時代を生きていた自分の周りの作家からもアイデアやモチーフを借り入れ、自分の作風や思想で味付けをすることで自身の作品として仕上げていくということが多くあり、Meredith はその素材を大いに提供してくれていたのではないか。Hardy 自身、「気まぐれでとるに足らない作品」(Takakuwa 19)のように卑下することもあった *The Well-Beloved* という作品だが、そこには、先輩作家に対する親愛と皮肉の情を込めたパロディ的戯れという側面を見て取ることもできるのではないだろうか。

引用文献

Hardy, Thomas. *The Pursuit of the Beloved*. 1892. Ed. Patricia Ingham. *The Pursuit of the Well-Beloved and The Well-Beloved*. Penguin, 1997.

Meredith, George. *One of Our Conquerors*. 1891. Charles Scribner's Sons, 1899. Web. Internet Archive.

---. “The Gentleman of Fifty and the Damsel of Nineteen.” Web. Project Gutenberg.

Takakuwa, Yoshiko. “The Well-Beloved: A Slight Novel.” *Studies in English Literature*, 59 (1983): 19-32.

Tomalin, Claire. *Thomas Hardy: The Time-Torn Man*. Penguin, 2006.